

「三月に」

誘われてたまにはいいか歩こうかオリオンみあげる冬のみち草

もう春か浅い眠りをくりかし夢とうつつは運ばれてゆく

おおらかな青をたたえて三月の空はゆっくり蕾ふるわす

春は空はるは風なり花の咲くあんがい人はひとりかも知れず

空き缶がへしゃげて夜にはみ出てる朝の来るまでそのままにする

熱い湯をのの字のの字にそそぎこみ 珈琲 飲むだろう 話はあとだ

暮れてゆくブルーの空に星ひとつ僕を呼ぶのは終業のベル

春風のびゆうびゆうと橋の上あれは原稿ばあつとまく女

真っ白な木蓮ゆらす春の風いつもの角は明るくなって

春の日に隠れ咲くはな沈丁花あやぶむ記憶あめになるかも

指さきがふるえているよ春なのに白い花びらそこにあるのに

こめかみにコツンとあたり飛んでったあの虫のせいです頭がイタイ